

令和 2 年 5 月 26 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02281

研究課題名(和文)ベトナムにおける「美術」受容に関する研究

研究課題名(英文)A Study on the Adaptation of Beaux-Arts in Vietnam

研究代表者

二村 淳子(Nimura, Junko)

鹿児島大学・総合科学域総合教育学系・講師

研究者番号：20782452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フランス支配下のベトナムで誕生した「美術」の概念を、装飾との関係において明らかにすることを目的とした。具体的には、和製漢語「美術」のクオック・グー表記であるベトナム語「美術(My thuat)」という言葉が、仏語Beaux-Artsの訳語として使われ始める20世紀初頭、どのような文脈で、どのように理解され、どのように根付いたのかを調査した。その結果、ベトナムの「美術(My thuat)」は、現在用いている意味とは異なり、工芸品のための装飾やデザインを指す言葉としてベトナム人たちに受け止められていたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、ベトナム美術史は、「美術」という西洋由来の翻訳造語を点検することなしに研究されてきた。つまり、「美術」の枠組みの外にある要素を看過し、お互いの「美術」が等価であることを前提として研究されてきたわけである。本研究は、諸文脈が複雑に絡み合う20世紀初頭のベトナムという時空間の知識体系を再現しつつ、フランスとベトナムの「美術」の差異を明らかにし、フランスが植民地に要求していたものは決して「絵画」や「彫刻」ではなかった事実を裏付けた。本研究の成果は、ベトナム近代美術史を新たに位置づけなおす契機を与え、また、アジアにおける「美術」という語彙の生成と流通にも貢献できたのではないかと自負している。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine the concept of “Fine Art” born in Vietnam under the French colonialism in connection with “decoration”. To be more precise, the study looked into how, and in what context, “My thuat” (the Quoc-ngu notation of美術[bijutsu], a Japanese sinogramme combination) was understood and took root in the Vietnamese culture in the early 20th century when the word was first introduced as the translation of “Beaux-Arts”, a French word. The study found that, unlike the contemporary meaning, “My thuat” was used to describe decorations and designs for craftworks.

研究分野：芸術、美術、フランス文化、東アジア文化、比較文化

キーワード：ベトナム近代美術 インドシナ インドシナ美術学校 ベトナム知識人 ファム・クイン 美術の初出  
東アジア美術 ベトナム画家

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

ドイモイ政策以降、ベトナムの美術事情は大きく変動し、競売でも目を見張るほどの値上がりを見せている。数々の展覧会が世界各地で催され、画家たちのモノグラフィーや画集も出版された。また、ハノイに創設されたインドシナ美術学校に関する実証的な研究も進捗がみられる。しかしながら、ベトナム近代美術は十分に研究されているとは言い難い。これまでのベトナム美術研究は、工芸・工業、装飾、教育といった「美術」の周辺・接触領域を無視し、もっぱら、西洋のヘゲモニーと理念に基づく正統的な「美術」のみを研究対象としているからだ。

もともと「美術」という言葉は、中国起源の言葉ではなく、国勢を列国に誇示するために近代日本で生み出された翻訳造語である。ベトナムでもこの漢字の読みをもとにし、ローマ字で *Mỹ thuật* と表記される。ベトナム美術研究の先行者たちは、「美術」という言葉が、比較的新しい翻訳造語であることを認識しておらず、近代西洋の *Fine Art* と *Mỹ thuật* があたかも等価であるという前提のもとに研究を行ってきた。言い換えれば、前近代との繋がりを無視し、西欧の学術枠による研究を行うことによって、西洋至上主義がベトナム美術史において再生産され続けている状態にある。このままでは、近代におけるベトナム人画家たちの課題・営み・葛藤・戦略といったものは看過され、フランス植民地が「美術」における近代化を引き起こしたという見取り図が定着してしまう。

ベトナム近代美術史の実相をつかむため、ベトナムにおける新訳造語である「美術」の枠組みと、それを支える意識構造を分析することは、必要かつ急務な課題である。本研究は、これまで看過されてきたベトナム知識人たちによる「美術」の言葉と概念の受容をテーマとして設定する。

## 2. 研究の目的

(1) 1990年代から既に積み重ねられてきた近代における日本美術概念と制度の研究、ないし、ジャポニスム研究を参考にしつつ、ベトナム近代美術の先行研究が見落としてきた視点を取り入れながら統合的に論じ、より立体的な20世紀前半のベトナム美術史の見直しを行う。

(2) 「美術」という和製漢語の枠組みや成り立ちを認識しあうことは、東アジアに共通の課題である。同じ漢字文明圏の一員である日本、あるいは中国の「美術」受容研究を踏まえたうえで、ベトナム美術への比較文化的アプローチを行う。それによって、ベトナム人たちによる「美術」の思想系譜を実証的に跡付ける。

## 3. 研究の方法

本研究「ベトナムにおける『美術』受容に関する調査」は、ベトナム美術研究者たちにこれまで見落とされてきた「美術」という言葉の受容過程に着目した比較文化研究である。具体的には、以下の4つの方法を柱とした。すべて文献研究であるが、当研究は、地理的・歴史的に様々な文化や事情が複雑に交差するゆえ、複数言語を用いることが必要になる。仏語、中国語、ベトナム語を駆使し、それぞれ、幅広い情報量による実証的な研究を行う。

- A: 「*mỹ thuật* (美術)」という言葉の辞書初出調査。  
フランス国立図書館、東京大学東洋文化研究所、フランス国立東洋言語文化学院図書館、パリ・フランス極東学院の図書館などを利用し、閲覧可能なすべての仏越・越仏・中越辞書を用い、*mỹ thuật*、ないし *nghệ thuật* (藝術)、*Beaux-arts*、*art* という語に関する調査を行う。
- B: 「*mỹ thuật* (美術)」という言葉の雑誌初出調査。  
フランス国立図書館、東京大学東洋文化研究所、フランス国立東洋言語文化学院図書館、パリ・フランス極東学院の図書館のほか、ハノイ国立図書館などで行う。また、*Gallica* をはじめとする電子図書館も使用する。雑誌および書籍において、当該用語が、誰によって、どのように使われていたのか、また使用された年を調査する。また、古い表記や言い回しのためにベトナム語読解が困難な場合はベトナム語の専門家のアドバイスを仰ぐ。
- C: 「安南美術 (*art annamite*)」の収集と分析。  
19世紀終盤に現れ、1945年以降は殆ど使用されなくなった *art annamite* というフランス語(この言葉は主にフランス人によって使用されていた)を用いた文献を収集し、その言葉の意味するところ、使われている文脈、および文脈の変遷を考察する。この用語の検索には、主として、*Gallica* をはじめとする電子図書館を使用する。
- D: ベトナム初の「美術書」の分析(グエン・ナムソン著『中国画 (*La peinture chinoise*)』1930年、ハノイ東京印刊)。既に申請者によって翻訳済みであるが、この著書に影響を与えている人物や作品を考慮しつつ、クリティカル・リーディングによってナムソンの美術論の基本構造を明らかにする。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究は、近年成果を得ている日本美術の制度研究を参考・応用しながら、ベトナム近代美術を点検し、統合的に論じ、新しく位置付けなおようとする問題意識のもとに行われた(なかでもとりわけ、基盤研究 A-25244008「日本における美術概念の再構築」の研究を参照したことを付け加えておきたい)。

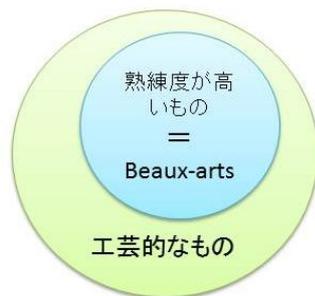
研究結果を簡潔に申し上げるとすれば、ベトナムの「美術」は、多かれ少なかれ、日本と同様の道程を経て受容されたことが理解できた。つまり、そのルートは、「工芸」の領域との大きな摩擦から「美術」が生み出され、何度かの誤訳・変容を経て、「国華」を表現するものと考えられ、やがては現在の意味へと収斂されていくというものである。

日本と異なる点は、ベトナムがフランス植民地下にあったという政治・経済的事情である。植民地下では、産業政策が優先され、絵画や彫刻といった作品の発展を遅らせる原因を招いた。19世紀終盤まではBeaux-artsは「産業」の同類語とされていたことがペトリュス・キー編纂の辞典から確認できた。また、職人たちの作り出す商品を海外に輸出するため、欧州人好みのデザインを手掛ける際に「美術」教育が行われたことも把握できた。

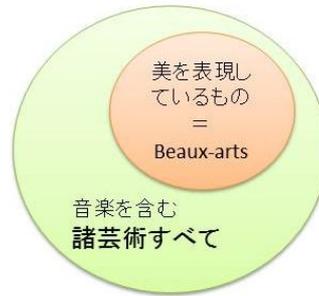
これらに関しては、論文「二〇世紀初頭のベトナム 美術 研究：開智進徳会の活動とクインの言説を中心に」や、「La Conception des beaux-arts par les intellectuels vietnamiens」、  
「ベトナムにおける『美術』の伝播に関する一考察：技術と学問の間で」、  
「植民地美術行政における海賊的境界侵犯 インドシナ美術学校とベトナム画家の怪帆の術」(稲賀繁美編『海賊史観からみた世界史の再構築：交易と情報流通の現在を問い直す』思文閣出版)、「ベトナム漆画の誕生 技術と美術の弁証法(稲賀繁美編『映しと移ろい 文化伝播の器と蝕変の実相』花鳥社)」に詳細を記した。

(以下の図表は2019年3月に国際美術史学会で発表した“La Conception des beaux-arts par les intellectuels vietnamiens”で使用した図表である)

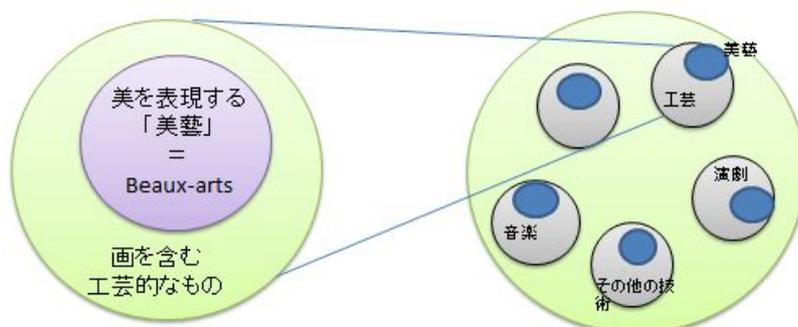
ペトリュス・キーのBeaux-arts



開智進徳会辞書のBeaux-arts



ファム・クインのBeaux-arts



(2) 海外で行った新資料の発掘・収集も本研究の大きな成果のひとつであった。ベトナムにおける仏越・越仏・仏越中辞典、類語辞典、それに、ファム・クインに代表される新知識人たちの『南風雑誌』でのエッセイ、ベトナム人による初めての「美術」サロン展 Salon 23 の記事からは、知識人たちが考える「美術」をつかむことができた。また、ベトナム初の「美術」書であるグエン・ナムソンの著書《La peinture chinoise》と、ナムソンの手記「ベトナム美術」は、画家たちがどのように「美術」をとらえていたのかを理解する重要なソースとなった。これに関しては、論文「ベトナム人画家ナムソンの美術論：『中国画』への一考察」や、「ファンチャンの『成功』：ベトナム絹画の誕生とその両義性」に詳細を記した。

(3) 研究代表の二村は、2019年3月11日、CIHA(国際美術史学会)にて、本研究成果の概要を“La Conception des beaux-arts par les intellectuels vietnamiens”として仏語で発表し、同分野の海外研究者たちと意見交換をすることができた。同じく、2019年8月2日には、ICLA(国際比較文化学会)にて、本研究にも関わる重要なベトナム近代画家の一人、マイ・トゥの絵画分析を“Adoption and Development of Popular Images in Mai Thù's Paintings: A Consideration for Modern Vietnamese Genre Painting”として英語で発表することができた。また、この二つの口頭発表は、前者はプロシーディング論文として発表する予定であり、後者に関しては鹿児島大学リポジトリで公開する予定である。

(4) 研究代表の二村は、本研究内容を盛り込んだ、1887年から1945年までのベトナム美術史「安南藝術(アール・アナミット)からベトナム美術(ミートゥアット・ベトナム)へ：フランス統治下の半世紀」を記し、博士論文として、東京大学に提出し、2019年9月23日に公開審査を受け、同年12月に博士号(学術)を取得した(報告書の「その他」に記載)。この学位論文は、ベトナムにおける美術や藝術の近代がどのように成立したのかを様々な観点から確認し、その様相を表わしたものである。なお、この学位論文は2020年度中に国内で刊行される予定である。

(5) 日本経済新聞の朝刊文化欄にて、本研究と密接に関わるベトナム画家たちを紹介した(新聞短期連載 二村淳子「エコール・ド・パリとアジア：十選」、日本経済新聞出版社、2018年12月11日~12月27日)。扱ったのは、レ・ヴァン・デ(12月11日「マリ・マドレーヌ」)、マイ・トゥ(12月13日「水浴び」)、レ・フォー(12月14日「ふたりの子ども」)、ヴ・カオダン(12月17日「ある少女の肖像」)、グエン・ファン・チャン(12月18日「オーアンクアン遊び」)、グエン・ナムソン(12月25日「ある老人の肖像」)、グエン・ザー・チー(12月27日「ベトナム女性たち」)の7人の画家たちの7作品である。この短期連載は、これまで日本においてほとんど知られていなかったベトナム近代絵画の、一般に向けての導入になった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 二村淳子	4. 巻 五巻 一号
2. 論文標題 ファンチャンの『成功』 ベトナム絹画の誕生とその両義性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 九州地区国立大学間連携教育系・文系論文集	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 二村淳子	4. 巻 41
2. 論文標題 ベトナムにおける「美術」の伝播に関する一考察：技術と学問の間で	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 VERBA 鹿児島大学言語文化論集	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 二村淳子	4. 巻
2. 論文標題 ベトナム人画家ナムソンの美術論：『中国画』への一考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 第67回美学会全国大会 若手研究者フォーラム発表報告集	6. 最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 二村淳子	4. 巻 34
2. 論文標題 二〇世紀初頭のベトナム『美術』研究：開智進徳会の活動とクインの言説を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 鹿島美術財団年報	6. 最初と最後の頁 45-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Junko Nimura	4. 巻 43
2. 論文標題 Adoption and Development of Popular Images in Mai Thu 's Paintings: A Consideration for Modern Vietnamese Genre Painting	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 VERBA 鹿児島大学言語文化論集	6. 最初と最後の頁 34-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Junko Nimura	4. 巻
2. 論文標題 La Conception des beaux-arts par les intellectuels vietnamiens	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Toward the Future: Museums and Art History in East Asia, Proceedings of the 2019 CIHA	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Junko NIMURA
2. 発表標題 The Conception of Fine Art by Vietnamese Intellectuals”
3. 学会等名 Congress of the International Committee of the History of Arts (国際学会)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 Junko NIMURA
2. 発表標題 Adoption and development of Popular Images in Mai Thu 's Paintings
3. 学会等名 The 22nd General Congress of ICLA (International Comparative Literature Association) (国際学会)
4. 発表年 2019年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 稲賀繁美、多田伊織、範麗雅、江口久美、二村淳子、倉田健太、寺本学、山本麻友美、金子務、テレングト・アイトル、君島彩子、デンニツァ・ガブラコヴァ、橋本順光、中村和恵、藤原貞朗、堀まどか、大西宏志、竹村民郎、村中由美子、根川幸男、三木順子、片岡真伊、ヘレナ・チャブコヴァー、郭南燕、鶴戸聡、千葉慶、今泉宜子、山田奨治ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 792
3. 書名 映しと移ろい	

1. 著者名 稲賀繁美、多田伊織、鈴木洋仁、片岡真伊、山田奨治、森洋久、藤原貞朗、山中由里子、平芳幸浩、呉孟晋、リカル・ブル、林洋子、小川さやか、山内進、フレデリック・クレインス、平松秀樹、劉建輝、二村淳子、江口久美、李建志、テレングト・アイトル、三原芳秋、申昌浩、千葉慶、大橋良介、中村和恵、鶴戸聡、大西宏志ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 852
3. 書名 海賊史観からみた世界史の再構築	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

<p>学位請求論文 二村淳子「安南藝術（アール・アナミット）」からベトナム美術（ミートゥアット・ベトナム）へ：フランス統治下の半世紀（東京大学大学院総合文化研究科）、2019年12月学位取得</p> <p>新聞短期連載 二村淳子「エコール・ド・パリとアジア：十選」、日本経済新聞出版社、日本経済新聞、2018年12月11日～12月27日</p>
--

## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----